

特集

千家十職と

みんぱく

三月一二日から特別展「千家十職×みんぱく―茶の湯のものづくりと世界のわざ」が開催される。千家十職とは茶道の三千家（表千家・裏千家・武者小路千家）にかかわり、茶道具を作る十の職方のことである。彼らに民博の資料をもとに作品を作ってもらおう、という試みは、資料を活用するあらたな手法でもある。千家十職と民博をつなぐキーワードでもある「手仕事」を、研究者の視点から見るとともに、どう博物館を利用するのかについても考えてみたい。

土風炉・焼物師
永樂 善五郎氏



指物師 駒澤 利高氏



竹細工・柄杓師 黒田 正玄氏



茶碗師 樂 吉左衛門氏



一閑張細工師 飛来 一閑氏



塗師 中村 宗哲氏



袋師・土田 友湖氏



釜師 大西 清右衛門氏

かけあわせの妙

八杉 佳穂
(やすぎ よしほ)

本館民族文化研究部

刺激的な宝庫

研究者は調査や研究の過程でたくさんモノをため込んでおり、論文や本などのかたちで公表されるモノはその一部に過ぎない。公にならない膨大かつ雑多な知識をそのまま墓場にもつていくといつていい。民博の収蔵品も展示に供されたり、研究用に活用されるのもそのほんの一部にすぎない。その豊かな文化資源は、研究資料として使うことは当然のことだが、我々だけでなく、外部の人にもさまざまな異なる観点から利用形態を考えて提案してもらおうことで、もっと活きてくるはずである。民博は、大きく叩くと大きく響く、そんな可能性を秘めている組織でいたい。

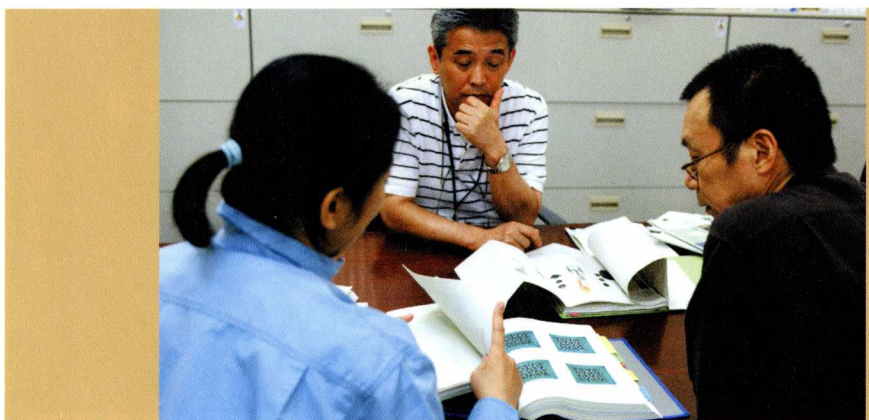
「千家十職×みんぱく―茶の湯のもの

づくりと世界のわざ」展は、民博の資料が、研究資料を越えて、さまざまなかたちで利用されることを千家十職の人と試みようとしたものである。千家十職は三〇〇年から四〇〇年をこえる長い歴史のなかで、利休好みのかたちや色を守ってきただけでなく、その時代時代に合わせ、創意工夫して新しい道具を制作してきた集団である。アーティストとよんだ方がよい人から職人氣質の人まで、いろいろな人がそろっている。そのためうまくいけば、民博の資料が、研究のためだけでなく、さまざまな職種の人にとって創造の源泉になりうる実例を示すことができる。そう思っって交渉を開始したのである。とはいえ、まさか十職の人たちが、こんな風変わりな企画を受け入れるとは思ってもしなかった。ところがモノを作る人たちである。この企画が実現したのも、その人たちにとって、民博は創造を刺激してあまりある資料をたくさん抱え込んでいる宝庫であったから、と信じた。

日本の伝統と世界の出会い

二〇〇七年二月に十職の方々展览展示場を、そして、二〇〇八年に入って、収蔵庫の資料を見てもらった。それは彼らの目を通して深い眠りにについているモノたちを揺り起こす作業であった。

茶碗師 樂 吉左衛門氏と
打ち合わせをする筆者



民博の収蔵資料は収集時期順に棚に収められている。そのため、アフリカの壺の横にメキシコの人形があったりして、調査する者にとってはコンピュータの補助がないと目的にあった必要なモノに出会うことができない。見る者にとって渾沌を極めた世界といつてよい。それがかつて創造者には刺激を与える。

彼らを選んだ資料は、大げさに言えば、世界を切り取ったものである。そのなかで特に創造を刺激する資料をもとにして、作品が作られた。茶道具を作るという制限のなかで作られた作品が、選ばれたモノたちとともに並んでいる。

十職が民博を活用した成果の展示が一階なら、民博が十職にえようとしたのが二階の展示である。我々は十職の手仕事を動詞で考えてみた。民博にあるほとんどの資料も手仕事によるものであり、「叩く」「塗る」などの動詞を利用して、素材や民族によって、どれだけ異なるものが生み出され、多様性があるかを示すことにした。

その風景はいかなるものか。ぜひご覧いただきたい。

博物館と積極的にかかわる

小林 繁樹
(こばやし しげき)

本館文化資源研究センター

創造への契機

博物館を見学者としての立場から一言
でいえば、まずは未知の知識をえ、ある
いは既知の知識を確認できる場のひとつ、
となるだろう。

または構想を練ったり発想をえたり、
あらたな創作や創造活動の手がかりをつ
かむ、といった利用もある。

「千家十職×みんなぱく」は、このうち創
出という意図を深く込めて企画している。
十職の方々が民博の資料を実際に手にし
て、どのように作品を創作するのか。こ
れがこの特別展の目玉である。それは同
時に、民博が創造への契機、発想の源泉
となりうることの証明である。特別展の
第三のテーマである「手仕事を動詞で考
える」は、その答えの一部である。

資料の選択にあたって十職の方々は、
展示場と収蔵庫をじっくり目で見ながら
探していった。直感や直観による選択で
ある。そして、資料の名称、つまり名詞を
基にコンピューターで検索したりリストも
参照した。

動詞で検索

見方を変えると見えてくる内容も変わ
る可能性があるならば、見方は多様な方
が展望は開けやすいたらう。そこでわた
したちは動詞を検索語として試みた。十
職の仕事内容にふさわしい動詞として、
叩く、鑄こむ、握ねる、削る、描く、塗る、
張る、組む、曲げる、切る、縫うの、十一語
を選び出した。そしてそれらの動詞を軸
に、関連する動詞を含めて四八語(活用
形はその幾倍かはあった)を全件制作法・
材料、用途使用法といった項目から検索
していった。民博の収蔵標本資料は二〇
〇八年四月現在、二五万七八六〇点を数
えるが、そのなかから検索語に一致した
のは二二万件余。ここから展示内容に適
したほぼ一万九〇〇〇件を詳細に確認し、
さらに展示にふさわしいものとして一一
〇四件を抽出した。

結果は予想どおり、動詞を使わないと
選ばれにくい資料が数多く登場してきた。
代表例は樹皮布、ステイールドラム、教
会の置物、竹製ハーブ、毛糸絵、竜骨車、

ケースの内にあるもの 外にあるもの —老いたる博物館員の つぶやき

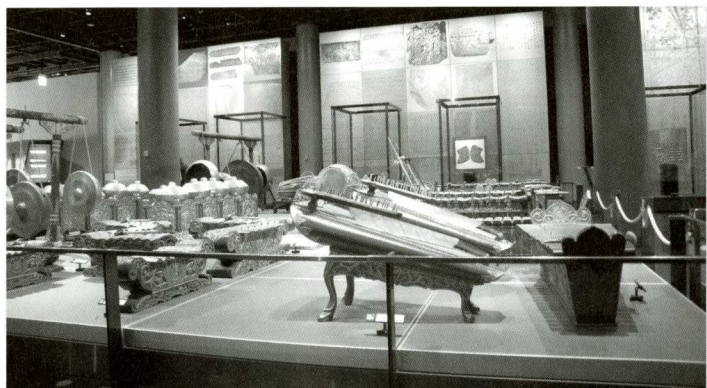
佐々木 利和
(ささき としかず)

本館先端人類科学研究部

「標本」として

今回の展示をご覧になる方のなかには、
ある種の戸惑いを感じられる方が少な
からずいらっしゃると思う。その戸惑い
は、露出展示とケース内展示とが截然と
され、しかも前者はほとんどが民博の所
蔵品であるということではなかったらう
か。民博の品物はなぜケースにいれない
の？と。

じつはこれはわたくし自身の戸惑い
でもあった。わたくしは古いタイプの博
物館員である。だから、というわけでは
ないが、油絵や彫刻作品を除けば、展示
という行為には常にケースが伴っていた。
ケースは展示品の安全を守ると同時に、
展示品のもつさまざまな価値をその空
間のなかで十分にひき出すことができる、



民博の常設展の展示の様子



樹皮製力ヌー、影絵人形、サケ皮の靴な
どである。

例えば樹皮布の場合、これは金物師の
仕事にあたる「叩く」という動詞に関連
している。金物師は端的にいえば金属を
叩き伸ばして容器を作り、樹皮布は樹皮
を叩き伸ばして作る布である。金属とか
容器といった名詞だけの検索では引つ
かかってこない。これはあらたに視点を
設けたことの成果であり、この展示が今
後の創造のキッカケにつながっていけば、
なによりである。

それにしても、作業中に考えたことは、
博物館に蓄積された情報はまだまだ足



置物(教会)。
新築の家の
魔除けとして置かれる。
粘土を手捏ねして
かたにする

竹製ハーブ(竹筒琴)。
表皮を縦に細く削りだし、
もち上げて弦としている

と教えられもし実践もしてきたつもり
である。

ところが民博では、あまりケースを重
要視しないようだ。それは展示する品物
の質にもよるといふことであらうか。民
博で展示に使用する品物を含め、収蔵品
を「標本」と称している。辞書によれば「標
本」というのは「実物採取・保存してお
いて見本として示すもの」とある。もし
てそれは民博の職員がみずからの研究目
的とその視点により収集したもので、
あくまで研究の対象としてなのである。

創立の当初から民博には「おたから」は
ないのである。この考え方は日本の博物
館では民俗資料の展示にもつながって
いる。

ケースを利用している展示は多くの博
物館・美術館でおこなわれている方法で
ある。この場合、展示の対象品は資料で
あり、文化財である。そして多くは美術
工芸品に分類される品物である。なか
には文化財保護法により国宝や重要文化
財に指定されたものもある。また法律の
指定はなくとも、これらはいわば「おた

りないのではないかとということである。
博物館に資料を提供した制作者の方々
や博物館の利用者の方々が、自らの経験
や知識、思いなどをどしどし寄せて、関
連する資料の情報を豊富にし、また別の
利用者がその情報をえて、活用するとい
う機能は、博物館にはおおいに必要なこ
とだろう。実際に足を運ぶ来館者に限ら
ず、インターネットなども利用して、情
報を相互に活用できるようにするとい
うのは、まさに開かれた情報集積回路の
整備といえる。集まる情報の正確さの確
保という問題点はあるにせよ、今後、積
極的に挑戦すべき課題だろう。

やはりケースに

から」である。十職のお家では代々伝え
られた家宝でもある。当然、取扱は慎重
でなければならぬ。しかしこうした品
物は、展示環境さえ整えてあれば、展示
は意外に楽である。なんとすれば、品物
みずからその存在を主張しているか
らだ。わたくしはこころも教えられた。す
なわち「ものをして語らしめよ」と(じつ
はこれが一番むづかしいのだけれども…)。

露出展示にはもちろん露出展示のよ
さがあり、ケース内展示にはまたそのよ
さもある。それらを一緒にしたかたちで
の展示もまた面白いといえる。

しかし、ケースの内側の品物は
外に出たいとは思わないだろ
うし、外にある品物もそのま
までいいとは思わないかもしれ
ない。標本であっても、その素
材はケース内の品物と同様に
脆弱なものも少なくないし、第
一、集められてから充分の時
間を経て、かれらは疲れてい
る。そして、もはや「おたから」
の地位さえ得ているものも少
なくない。

「やはりすべてをケースにいれ
てほしかったと老いたる古き博
物館員はつぶやくのである。」

千家十職とみんなぱく

特集

鉄が動く

笹原 亮二
(ささはら りょうじ)

本館民族文化研究部

以前、さまざまな普段使いの品々を作る職人たちに、仕事の様子を見せてもらったり、いろいろな話を聞いたりしたことがあった。それはわたしにとつて、じつに興味深い、目くるめく経験だった。彼らの仕事を訪れると、先ず目に飛び込んできたのはたたくさんの道具類だった。そこには普段なじみのない、不思議なかたちの道具がたくさん並んでいて、一体何に使うのか、なんてあんなかたちをしているのかと想像がかき立てられて、興味津々だった。

しかし、何よりも興味深かったのは、職人たちの仕事の技そのものであった。ある鍛冶職人によれば、「鉄が動く」という。鉄の塊を製品にするには、鉄をうまく動かさなくてはいけない。思ったように動かせるようにならないと、製品は作れないというのである。わたしは「なるほど、そうですよね」などと軽く相づちをつち、メモを取りながら、堅い鉄が動くなんてたとえ話だろうと高をくくっていた。しかし、そうではなかったのである。

実際に作業が始まると、彼は鉄の塊を鉄でつかみ、ふいごであおった炉の炎に入れて十分熱し、金床に



本体の鉄に鋼を
わかし付ける作業。
この時は、ひときわ
大きな火花が散る

ヨンボンゴウを鍛造する東京都
多摩地区の鍛冶職人。
周囲には、無数の奇妙なかたちの
道具が並んでいる

のせて金鋸で叩き始めた。叩くたびに火花が飛び散り、表面に黒ずんだ不純物が浮かんでがれ落ち、そのうち、堅かったはずの塊が次第にかたちを変え始めた。彼はそれを、まるで鉛細工のように延ばしては折り返し、それを何度も繰り返す。そして、あるときは更に延ばし、あるときは広げ、またあるときは細く尖らせる。すると、さまざまな製品が次第にかたちをあらわしてくる。それは、確かに「鉄が動く」としかいえないような光景だった。わたしは、動く鉄の姿に思わず魅入って目をそらすことができなくなっていた。

一般の人びとには幻術や魔術としか思えないような、思いもよらない素材の可塑性を巧みに引き出す手仕事の技は、鉄に限らず木や土や紙をあつかう職人たちにも共通する。人びとが彼らの技に訳もなく魅せられてしまうのも、そのあたりに由来しているのかも知れない。

煙を読む

中村 真里絵
(なかむら まりえ)

総合研究大学院大学
文化科学研究科博士課程



長い棒を使って、窯に木の枝を押し込む。
雨期でも作業をするため、窯には屋根がある

タイ語で土器のことを、「クルアン(器)パン(成形する)ディン(土)パオ(焼く)」とよぶ。タイ東北部のダーン・クウィアン地域には、土器作りを生業とする人が多く住む。土器作りには、粘土の準備、成形、装飾、焼成という製作工程があり、各工程には専門者がいる。なかでも職人とよばれるのは、成形と装飾をする人た

ちのみである。ここでは「焼く人」とよばれる男性マイ氏の仕事を紹介したい。

一週間に一度ほど、マイ氏は夕方暗くなってから窯焼きにとりかかる。作業は四、五時間かけて、窯の入り口に少しずつ薪である木の枝を突っ込むことから始まる。窯が高温に達すると、蓋を閉めて蒸らした状態で数日おく。窯の温度は最高で二二〇〇度にも達する。煙突から立ち上る煙やのぞき窓から温度の確認をする。

この「煙を読む」作業には、素人にはわからない熟練の動が必要である。焼成は、季節や天候に左右されるため、微妙な調整をしなければならない。焼成した土器の全てがうまく焼けているとは限らず、一部はヒビが入っていたりする。マイ氏は、九〇%以上の土器がうまく焼けていれば上出来であるという。以前に一度だけ、作業の途中で眠ってしまった、失敗したことがあった。そんな彼の必須アイテムが缶コーヒーである。火のそばでの作業は汗だくになる。六〇歳代のマイ氏にとって、決して楽ではない仕事である。彼は、以前、成形の職人をしていたことがあるが、今では窯焼きの仕事をするようになった。一晩集中して、一気に土器を焼き上げて終了、そんな焼成作業が自分の性分にあっているのだという。

仕事の報酬は一回五〇〇バーツ。決して高くないが、子どもが独立した彼が生きていくのに足る値段である。焼成が終わった日、一眠りをしたあと、外に出てきたマイ氏は必ずビールを買う。やはり仕事後のビールは格別の味だ。

今も時折思い出すのは、農村地帯の暗闇のなかで、煙突から出る煙をじつと見つめながら、缶コーヒーを飲む彼の姿である。

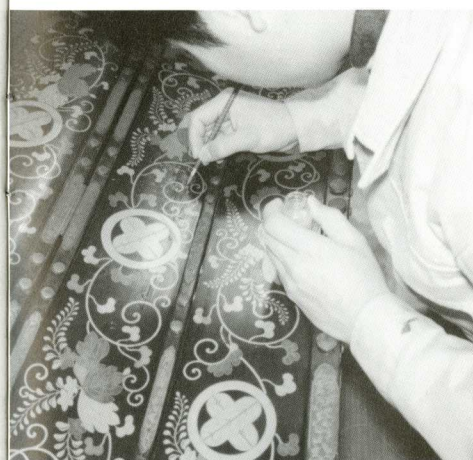
漆を修復する

日高 真吾
(ひだか しんご)

本館文化資源研究センター

千家十職の仕事には漆に関係するものが多いが、文化財の保存修復でも漆工品が対象となることが多い。民博に所属しているわたしは、元々は民俗文化財の保存修復を専門としていた。ここでは民俗資料の保存修復の専門家としてかかわった漆工品の修復について触れてみたい。

わたしが修復を担当したのは、黒漆塗金時絵女乗籠くろしつぬきときえにまなかりかごという大名家の婚礼等で用いられた女性専用の駕籠である。漆工品の文化財の保存修復は漆芸家が漆



剥離した漆膜を膠で剥落止めしている作業
(財)元興寺文化財研究所提供

を用いておこなうことが多いが、この修復では、例えば再修復の際、除去できる材料を用いることが方針であった。そこで、除去の難しい漆は用いず、除去の可能な合成樹脂や膠にかわ、小麦でんぷん糊などで修復することとなり、わたしが担当することになったのである。

しかし、女乗籠が名家の調度品である以上、仕上がりしやうりの美しさは当然求められる。わたしは手持ちの材料でそこまでできるのかと困った挙句、奈良在住の漆芸家であり、また数多くの漆工品の修復を手掛けられている北村昭斎先生、繁先生のもとに教を乞いにかがった。ここでは漆芸技法の知識だけではなく、実際に漆塗りの技術を体感しようと手板作成のご指導をいただいた。

経験してみたところ漆塗りは本当に難しい。天然の樹液である漆は粘りが強く、それを均一に塗るのは至難の業である。ただ、先生方は漆以上に粘り強くわたしにつきあってくださり、そのおかげで約半年をかけて一枚の手板を仕上げることができた。突然押し掛けたうえ、不器用なわたしに対して親身になって教えてくださった先生方には感謝のことばもみつからないが、ここでの貴重な経験は女乗籠の修復に活かされた。

それから二年後、わたしが担当した女乗物はなんとが無事に修復を終えることができた。この仕事は民俗文化財の保存修復家と漆芸家の協同作業でおこなえたものだと感謝しているし、このときのご縁は今でも続いている。このような協同作業もまた、仕事の大きな魅力でもある。

特集

千家十職とみんぱく